

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

88
AUTUMN
2021

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



花と鳥のかたち

特任館長 榊原悟

(承前) 注目すべきは、その筆者だ。ここでも曾我蛇足だと伝える。しかも、名にし負ふ、あの蛇足だと云う^⑧。となるところの掛物、「蛇足の鼯」として当時人口に膾炙していたのかも知れない。ただし蛇足は、曾我派の絵師たちが歴代号しており、この場合の蛇足が誰にあたるのか、不明。それに作品そのものも伝わらない現状では、その当否も判じ難いのだが、かと云ってすべて否定する積極的理由もない。「名に負ふ」とまで云う以上、そう鑑みる根拠があつたはずで、「蛇足の筆」の語は、少なくともこれが曾我派の作であることの謂である、と認めたい。

むろん、そう思うのは、等伯(信春)が、草蟲画を得意とした曾我紹祥に学んだ、と云うことが念頭にあるからだ。その曾我一門内での粉本学習の中から信春は、「梅に鼯雀図」の原図ともなつた図像情報を得たのではなかつたか。戸山荘の御茶屋に掛けられた蛇足の「雀鼯絵」は、そうした図像情報になるような作品が確かにあつたことを物語る。

そこで確認しておきたいのは、信春の「梅に鼯雀図」制作の事情だ。一門内での粉本学習で得た図像情報に基づくと述べたが、鼯雀と云う類例の乏しいモチーフと、これを描いたのが信春の修学期であることとを思えば、信春はおそらく学んで得た図像情報を改変することなく、ほぼそのままなぞつたのではなかつたか。要するに同じ雀鼯をモチーフとするものの、ページニア本『花鳥草虫図押絵貼屏風』の一図「梔子に鼯雀図」を原図とするはなかつた、と云うことだ。むしろ逆に現に模本として伝わる信春の「梅に鼯雀図」こそは、蛇足の「雀鼯絵」の姿を現在に伝えてくれているのではなかつたか。

となると、捕えられた相方を思い、梅の枝で逆さまになつて鳴く雀の特異なかたちが、「遮莫」印の『梅樹小禽図』のそれと酷似することから、両者の間に影響関係を想定したが、改めて考えてみる余地がありそうだろう。

蛇足の「雀鼯絵」に、既にそうした逆さまの雀が描かれていた可能性が高いからである。当然その蛇足画の原図になつた唐絵草虫画にそれがあつたとみるべきで、さらに云えば「遮莫」印捺印画にも同様の原図となつた唐絵草虫画を想定すべきだろう。逆さまの雀の図様を描き出すだけの眼は、当時日本の絵師に期待するのは無理だと思ふからである。鼯に喰われる雀、取っ組み合いの喧嘩(?)をする雀、両者の違いは、いわば唐絵草虫画の変容の範囲と云うことになろうか。それにしても、御通抜当日、その蛇足の「雀鼯絵」を鑑み家齊の満足は察するに余りある。

そして信春である。既に彼は、「常鷄に狙われた虻」(京

博三幅对本左幅)、「捕えた虻を子に与える雀」(『海棠に雀図』)を描いている。その雀も、いままた鼯に捕えられた。まさしく捕食の連鎖である。各図、それぞれ厳しい生命の営みが写されてきたのだが、それらがまたゆるやかに繋がり、展開をみせる。一図が、もう一図の後日譚をなす。もとよりこの展開に沿って三図が描かれたわけはないかも知れない。とは云え、先に推定したように矩形印の使用が袋印の後と見れば、雀がついに喰われてしまった「梅に鼯雀図」が最後に制作されたことになり、まことに都合がいいのだが。だが、いずれにせよ、唐絵草虫画の主題が、簡潔な道具立てで見事に信春の世界となつた。その原本は、大正初年まで大阪博物館(当時大阪にあった総合博物館)に保管されていたようだから(山本氏前掲作品解説)、再び出現することを切に願う次第。むろん、その原図となつた名に負ふ蛇足の「雀鼯絵」も、である。

となると信春は、入門した曾我派にはじまり狩野派や、そしていままた唐絵草虫画に学んだ。さらに「等伯」と号した、信春から等伯への過渡期、舶載された明の本格の花鳥画までも丁寧な模写した(田中一松「等伯の二作品―未紹介の山水画と花鳥画―」『國華』九〇一号 一九六七年)。目にした、あらゆる作から、絵師として立っていくための慈養を摂ろうとする姿勢が顕著で、それはそもそも「白雪舟五代」を数えるのが無駄と思わせる程だが、そうした修学における雑食性こそが、流派的バックボーンを持たない能登の田舎絵師信春の真の姿ではなかつた。信春花鳥画の虫の所縁をたどると、それが分かる。

だが、唐絵草虫画の影響は、永徳や等伯(信春)の花鳥画に留まるものではなかつた。時代は下るが、さらに思わぬところに、その痕跡を留めていた。

堺の虫たち

土佐光則(一五八三―一六三八)の『雑画手鑑』と聞いて、思い浮かべることができ方は、そう多くあるまい。所蔵するのは東京国立博物館。数多い所蔵品のなか展示される機会も少ない。実際、作品を目にした者となると、さらに少ないだろう。

だが幸いにもわたしは、学芸員時代、自らの手で展示する機会があつた、画帖としても極小の画面であるためか(タテ十三・五×ヨコ十三・三センチメートルのほぼ正方形)、美術館の大きな空間にはそぐわないよう、鑑賞者自らが手にしてこそ、より深く愉しむことができる、そんな作品もあるのだと、その時、痛感した。



図1



図2



図3



図4



図5

- ①「陽春群雀図」(図1)
梅 土筆 蒲公英 葦 薇 笹
紋白蝶 親雀が啄んだ虫を子雀に与える
- ②「芙蓉群虫図」(図2)
紅・白芙蓉 苧 蠶 飛蝗 螽斯 蟋蟀 蛙 蝸牛
- ③「秋草小禽図」(図3)
薄 苧 萱 菊 蔓性の植物
小禽に捕われた虫(蛙)、狙われた蜘蛛の巣の蜘蛛

- ④「朝顔蜻蛉図」(図4)
朝顔 薄 苧 萱
蜻蛉尽し(鬼ヤンマ・銀ヤンマ・赤トンボなど) となめ(交尾)する二尾も
- ⑤「粟穂群蝶図」(図5)
粟 女郎花 山帰来
蝶尽し(紋白蝶 揚羽蝶 岐阜蝶など)

それを手に取り展示する一学芸員冥利に尽きるとは、このことだ。極上、純良な絵具が美しい。わたしのものも好きな作品の一つだ。紀州徳川家伝来。全二帖、三十三図よりなる。重要文化財に指定もされてないが、それと較べても全く遜色はない。未指定が不思議な程だ。また、そうであればこそか、世の中確かな鑑賞眼を持つ人はいるもので、戦前と戦後、二度までも原寸大の複製本が出ているし、わたしもその驥尾に付し、土佐・住吉派の画帖形式の作品を集めて一冊にまとめた際、全三十三図をほぼ原寸大の図版で掲載した(榊原悟編『土佐・住吉派 光則・光起・具慶』 江戸名作画帖全集V 駿々堂 一九九三年)。

前置きが長くなったが、その三十三図の内訳は、舞楽図が十三図、風俗図が八図、そして花鳥草虫図が十二図。相互に脈絡の無さそうな図が並ぶところから『雑画手鑑』と呼ぶ。身も蓋もない、損な命名だが、他に適当な呼び方も無いため仕方ない。むしろ、わたしたちが問題としたいのは「草虫画」で、次の五図を数える。

虫と描かれているからと云って、ここでは草花も必ずしも「漢」に係わるものではない。春・秋の七草も取り入れられている点、見逃してはならない。時代故であろうか、既に虫たちも「漢」の桎梏から解き放たれているのだろう。ただし虫については、生憎、虻と蜥蜴、草虫画の顔とでも云うべき二つは登場しないが、他は、おおむね一致する。しかも①には、親雀が子雀に無防備にも地上で餌を与えている。そんなことが本当にあるのか否か、それ自身が疑問であるにせよ、啄んだ虫を口移しに与えようとしているし、③にも小禽に狙われた蜘蛛が、巣と共に描かれている。方十三センチ余りの極小画面に、だ。驚異的な細密描写である。しかも捕食のかたちである。①の親子の雀など、先に信春の『海棠に雀図』で見た光景である、唐絵草虫画の世界がかたちを換え、ここに至ったと見るべきだろう。

その虫たちを色紙に、それも通常の一回りも二回りも小さな色紙に描いた。先学が襖や屏風に描いても詮方ないと断じた、細かな虫を、である。むしろ、光則が先学の言葉など知るよしもない。だが、光則は絵師として、詮方ないことは先刻承知ではなかったか。その上でなお、そんな虫たちを、細密な描線と鮮麗な彩色を駆使した得意の細密画法で描いたならば、どうなるか。細かな虫だからこそ敢えて極小画面に描く。そこに生まれる視覚効果を自覚していたことに外なるまい。しかもそのこと自体が、既に当時の絵画史の最前衛を往く試みではなかったか。当然、その描かれた虫の小宇宙を愉しむのに遠目の鑑賞でこと足れるはずもない。それを覗き込み、舐めるように見てこそ、この節の冒頭で本画帖は、鑑賞者自らが手に取ってこそ、その真価が分かれると述べた真意も、そこにある。

その虫の小宇宙こそは、唐絵草虫画の虫たちの行きつく果てであり、同時にこの時代の表現の極北でもあった。十二図の草虫画を含むこの『雑画手鑑』の極小細密画群の価値は、百万語を費やしても言い尽くせない程に大きい(未完)。

図版ネーム 図1 陽春群雀図 土佐光則筆『雑画手鑑』のうち
図2 芙蓉群虫図 図3 秋草小禽図
図4 朝顔蜻蛉図 図5 粟穂群蝶図

開館25周年記念 特別企画展

至宝 燦めく岡崎の文化財

会期.. 第一部 令和3年10月9日(土)～11月7日(日)

第二部 令和3年11月20日(土)～12月19日(日)

湯谷 翔悟



飾馬形埴輪 (外山第3号墳) 岡崎市教育委員会蔵

この「至宝 燦めく岡崎の文化財」(以下、至宝展と略記します)は、ひとことでは、原始古代から戦国時代までの岡崎市域の文化財の名品展ということになりましょうか(なぜ戦国時代までなのか、の理由と経緯は、前号の拙文をご覧ください)。一度も都や幕府が置かれたことのない一地方の自治体の文化財展としては、各時代とも見応えのある資料が並ぶ展示となっていると思えますが、ご覧になった皆さまにはどう映りますでしょうか。

実は当館は、今年で開館二五周年を迎えました。岩合光昭写真展や水木しげる展を開催してききましたが、至宝展は逆に、これまでの展示を踏まえた、いわば四半世紀の集大成となる展覧会です。二五年間で様々な展覧会を開催してきましたが、それを総括して紹介することで、これからの岡崎の歴史を解明していく道しるべになれば、というのが、至宝展を開催するきっかけであり意義だと思っています。ひとことで表すとすれば、この至宝展は、「これまでを踏まえて、これからを示す展覧会」となるでしょうか。以下、それを具体的に示すために、①当館の活動の成果の紹介、②近年の研究の進展の紹介、③新発見・新知見の提示という三つのポイントから至宝展を紹介していきます。

①当館の活動の成果

当館では開館以来、多くの展覧会を開催し、多くの資料や調査結果を紹介してきました。至宝展は、これまでの展覧会を改めて振り返り、それをダイジェスト版として紹介

する面もあります。

例えば岡崎は足利氏や松平・徳川氏ゆかりの寺社や、この地域で広く信仰される浄土真宗の寺院が多いことから、三河の仏教に関する展示を多く開催してきました。瀧山寺の運慶仏と十二神将立像や、天恩寺の地藏菩薩像の像内納入品など、当時の最新の調査成果や発見を、広く皆さまにご覧いただく機会にもなつたと思います。現在ではよく知られることとなつた資料が展示されることとなりますが、「あの時見た仏像が忘れられない」とか、「あの時出品していた古文書を見逃したのが悔やまれる」という思いを抱いている方には(いるのか? いますよね!?)、その文化財に出会えるチャンスです。

一方で、当館で埋蔵文化財に特化した展覧会は多くありませんでしたが、矢作川河床遺跡や北野廃寺跡出土品など、岡崎の歴史のルーツを辿る中でも紹介されてきました。本展では「至宝」というタイトルにのっとり、「展示映え」する資料を中心に展示しています。国内でも稀な完形の緑釉花文輪花椀、岩津第一号墳の出土品、飾馬形埴輪、矢作川河床遺跡の物量と時代幅の見える展示など、見応えのある資料が並びます。

②近年の研究の進展

岡崎の歴史を知るには、今でも『新編岡崎市史』が基本となります。しかし刊行完了から三〇年近く経ち、その後に進められた愛知県史や近隣の自治体史の編さんや、絶えず行われている発掘調査は、岡崎市域にとつても重要な成果をもたらしています。もつとも、それらを逐一調べていくのはなかなか大変な労力が必要です。この至宝展では、近年の研究成果を取り込むことで、『新編岡崎市史』の増補的な役割が果たせたいと思っています。ただ、言うは易しですが、『新編岡崎市史』時点では確認されていなかった西牧野遺跡の発見は、この地方における旧石器時代研究の進展に大きな影響を与える重要なものです。瀧山寺の運慶仏は、装飾品が造立当初のものかどうか議論が続いていますし、十二神将立像も詳細な調査が進み、さらなる評価の高まりが期



地藏菩薩坐像像内納入品 天恩寺蔵



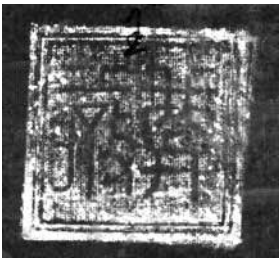
東照大権現像 岡崎市蔵

待されています。また松平氏研究は、近年最も進展があった分野の一つです。拠点のひとつだった岡崎には、家康に限らず多くの松平氏関連資料が伝わっています。大樹寺文書の中の「松平一族連判状」は以前からよく知られた資料でしたが、その解釈は見直しが図られてきました。

至宝展では、近年の研究の進展をできる限り踏まえながら、地域の文化財を紹介するよう努めています。また岡崎の歴史と文化財について、各分野・各時代のフロンティアの先生方にご講演と図録へのご寄稿をしていただきます。

③新発見・新知見の提示

至宝展開催のための調査でも、いくつか新発見・新知見があります。本当はこれがポンポン出せば最高なのですが、なかなかそうも行きません：スママセン。近年、松應寺の開山 隣上人の画像が見つかりました。表具の状態があまり良くないため実物の展示は断念しましたが、存命中に描かれた寿像の可能性もある重要な資料を初紹介します。また新発見の徳川家康書状も出品します。遠州の小笠原氏宛の安堵状で、長篠合戦前の遠州統治に腐心する状況が垣間見えます。



印文に守澄の前の名である「尊敬」と見える

新発見としては、満性寺の親忠寄進状が写しである可能性も示しています。『新編岡崎市史』が「二人の親忠」と紹介している資料ですが、写しするとまた別の資料的価値が生まれてきます。またこれまで度々展示してきた「東照大権現像」、要は家康を描いた絵ですが、これまで上に書かれた文

字（賛といいますが）を誰が書いたか特定できていませんでしたが、捺された印鑑を解析した結果、守澄法親王と判明しました。これにより画像の制作年代をかなり特定できます。

あつ、そうそう。今回大樹寺多宝塔の屋根裏に上がることができました。松平清康（徳川家康のおじいちゃん）の名が記された心柱の墨書を確認するためです。清康という人に謎があまりに多いため、心柱もとやかく言われていましたが、墨書、ありました。色々検討が必要ですが、その材料は提供できていると思います。

なお本展は、資料点数の多さから二部に分けて、全資料を展示替えします。第一部で原始古代～室町時代、第二部では戦国時代の資料を紹介していきます。資料が多いということは：先号でも言いましたが、今回の展覧会図録は過去最厚となっているはず。今（九月上旬現在）も目下執筆中：

少しでも良い展覧会、良い図録になるよう頑張ります。原始古代から戦国時代までという、これだけの長い時間軸で岡崎の歴史を知る機会が、今後もそう多くはないと思います。岡崎市所在の文化財という制約はあるものの、通史的に紹介するこの至宝展が、常設展示のない当館における、歴史へのいざないの機会になれば幸いです。



大樹寺多宝塔心柱墨書銘「大旦那世良(田)」と見える

表紙画像…十二神将立像 瀧山寺蔵

至宝 燦めく岡崎の文化財

出品資料

緑釉花文輪花碗

矢作川河床遺跡
平安時代前期
当館蔵



口径 12.8cm・器高 4.1cm

第I部

わずかに端部を欠いていますが、ほぼ完形品といつてよい緑釉の碗です。口縁外面の五か所に、指頭で押圧を加えて輪花を作り、口縁内面の輪花の間と内底面とに陰刻花文が描かれています。内底面の花文は唐草文の一種である宝相華風に描かれて、全体に洗練された意匠となっています。素地は硬く、暗黄緑色の釉がかかっています。

緑釉陶器は鉛を主体とした釉薬を用いた施釉陶器で、光沢のある濃緑色から淡緑色に発色します。高度な技術を要し、生産地域も限られる高級品です。この製品は県内の尾北窯もしくは猿投窯で焼成されたものと推定されます。

この美しい器が、岡崎市内を縦貫する矢作川から採集されました。市内矢作川の河道と河川敷は、矢作川河床遺跡という埋蔵文化財包蔵地となっており、縄文時代早期以降の土器や陶器が出土しているのです。

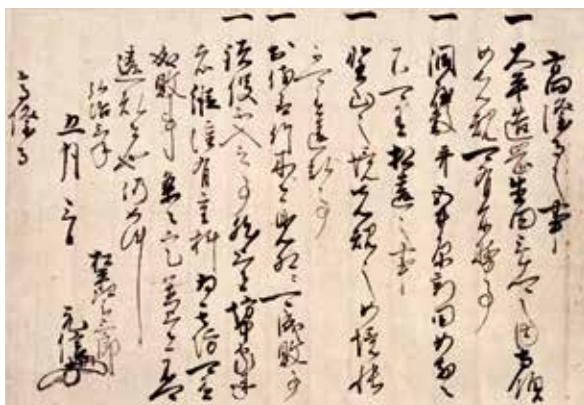
同じような碗は、破片が他の遺跡からも出土していますが、割れておらず完全な姿を保っているものは、全国的にみてこの矢作川から採集された本品だけであると、言っても過言ではありません。岡崎の至宝は河床に眠っていたのです。

(伊藤 久美子)

5

松平元信判物

室町時代 弘治三年(一五五七)
高隆寺蔵



第II部

岡崎出身の武将として有名な徳川家康。家康という名に至るまでに竹千代・元信・元康と名乗りを変えていたことはご存知でしょうか。今回解説するのは、貴重な元信の判物。この判物は元信が高隆寺の寺領を安堵し諸役不入などを定めたものです。

天文二十四年(一五五五)三月、竹千代は十四歳で元服し、今川義元の元の一文字を与えられ、「松平次郎三郎元信」と名乗ることになりました。その後、祖父清康の勇名にしたい、康の一字を受けて元康と改名することになります。いつ元康に改名したのかということについては明らかになっていませんが、この判物の弘治三年(一五五七)五月三日の段階では元信で、それから約一年二か月後の永祿元年(一五五八)七月十七日に発給された文書では元康となっていることから、この間に改名したと考えられています。つまり、元信と名乗っていたのは二年から三年半という短い期間だったのです。当然、元信という名が記された文書は大変希少で、元信の花押が記された現存する文書は、この高隆寺に宛てた一通のみなのです。元信の判物が見られるのは岡崎だけ。岡崎という地域には、歴史を語るには欠かせない貴重な品が守り伝えられてきたということを実感していただけることでしょう。

(山下 葵)

「水木しげる 魂の漫画展」を終えて雑感

今泉 岳大



加藤泉〈Untitled〉2006年 当館蔵



(iii)



(i)



(iv)



(ii)

△じめつとしたもの▽

今年の夏は雨が多かった。クイズラリー「恩賜池を探索して妖怪を探そう」は大勢の来場者に楽しんでもらえたが、雨によって参加できなかった人もいただろう。それについては残念ではあったが、一方で、雨でじめじめした森は妖怪的異界感を演出した。設置した妖怪オブジェは、目を逸らした瞬間に動き出しそうな程生き生きして見えたり、森に潜む本物の妖怪たちも居心地がよかったことだろう。このじめじめした感じは、妖怪を感じるには欠かせないものであるようだ。当館にも収蔵作品があるアーティストの加藤泉氏が雑誌のインタビューで水木しげるに触れ、このように述べている。

（加藤泉の育った島根県）対岸の境港は水木しげるさんの育ったところですが、自分にとって水木しげるさんの絵のじめつとした暗い感じは、やはり山陰という土地から生まれたものだと思いますし、不思議じゃないというか馴染みがあります。¹⁾

加藤泉は、じめつと、そしてどろっとした筆致で原初的な命のかたちを表現するが、赤子が母体からどろっとした状態で生まれるように、生き物の命がはじまる場所も概ねじめつとして

いる。だから、私たちが目に見えないものの存在、その気配を感じる場所も概ねじめつとした暗いところが多いのだろう。

△妖怪のせい▽

水木しげるの展覧会ということで、会期中当館の事務所内では、ちよつとした不思議なことや不可解なことが起ると、ほとんど「妖怪のせい」で処理されていたように思う。元を辿れば私たちの小さな思い違いであるにも関わらず、抜き差しがたい現実的な理不尽さを、こごぞとばかりに妖怪のせいにして、できるだけ穏やかに収めようとした職員たち。そして、身に覚えのない責任を押し付けられ、理不尽を被った妖怪たち。目に見えないものの存在は、なるほど私たちの日々の営みから生じる様々なズレを埋める緩衝材となっていていてくれるのだ。

小さい子どもがいる私も、子供が起きた様々なトラブルー牛乳をこぼした、おもちゃを無くしたーを小人のせいにして家族でやりくりしている。小人のおかげで暮らしが少しでも快適になるのなら、小人は本当にいるのである。目に見えないものの存在は、心のくぼみのようなところに偏在している。

△画家たちが到達しえなかった

水木しげるの妖怪画▽
学芸員にとって、企画展で取り扱う作家やその作品について、展覧会がはじ

まっつから新たな気づきを得ることが少なくない。展覧会を準備する中で水木しげるについて通り一遍のことは勉強したつもりになって通っていたものの、開幕後、水木しげるファンの方々や、講演会に登壇いただいた講師の方々から話を聞き、特に妖怪画における水木の偉業について改めて学んだ。

妖怪画はイマジネーションと作画能力だけではなく、加えて研究者としての調査ー民間伝承と創作、語りと図像、相矛盾する様々な記述を包摂することーを必要とする。水木の妖怪画は、彼が育った環境や競争体験、そして実際にそれを信じる好奇心が備わった漫画家だからこそ成し得た業績であるのだ。

妖怪やもののけを表現することは日本の画家たちも取り組んできたテーマではある。しかし、広く、そして長く大衆に記憶される妖怪のイメージを造るには、水木の分野横断的で学際的な研究と、漫画という手軽で大衆的なメディアが不可欠であったのだろう。

美術博物館として、これからの時代に扱うべきものの揺れを、じめつと感じる。

(i) 化け猫

(ii) 小鬼

(iii) 大蛇

(iv) 松岡徹「毒石」(部分) 2021年

1) 『月刊美術』二〇二二年二月号、サン・アート、二〇二二年九月四日(土)に開催したトークイベント「コロナから改めて考える目に見えないものの存在」、講師は飯倉義之氏(國學院大学准教授)と島田尚幸氏(あいち妖怪保存会共同代表)。

妖怪保存会共同代表。

SHOP INFORMATION



食欲の秋。お米がおいしくなる季節。

創業 80 年余りの桐箱の老舗、福岡の増田桐箱店が作る桐の米櫃は、桐のもつ調湿性と防虫効果でお米をおいしく保ってくれます。

暮らしの中で使いやすい工夫と細やかな気遣いが伝わってくるのは、骨董や美術品などの保存箱も手がけ、その高い技術を米櫃にも活かして丁寧に作られているから。木のぬくもりを感じるシンプルなデザインで、見せる収納としてインテリアにもスッと馴染んでくれます。

営業時間 10:00 - 17:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
TEL 0564-83-5952
FAX 0564-83-5953
MAIL yagura@b-soup.com
HP <https://www.b-soup.com>

YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お酒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をすることができます。展示毎にシェフ考案のコラボメニューも登場。カフェタイムにはやケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間 11:00~21:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00)
TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:00 (L.O.20:00) ※土日祝日のみ営業
TEL 0564-28-0141
HP <https://your-table.owst.jp>

YOU USED TO BE



戦争中に男性が着用していた「国民服」をご存知でしょうか。カーキ色の軍服のようなデザインの服で、ドラマや映画でご覧になった覚えがあるかもしれません。「国民服」は戦時体制下の物資不足が見込まれる中、昭和15年に勅令で制定されました。紫色の組紐でできた儀礼章を掲げることとで礼服の代わりになり、上衣の下には着物襟のついた「中衣」という独特のシャツを着ることとされましたが、これはとうとう普及せず、ネクタイ・ワイシャツ姿の人が多発してしまいました。烏帽子をモチーフにしたという専用の帽子もデザインされました。

技術面では、脇下の汗抜きのための開口部やサイドベントの採用など、当時としては画期的な部分がありました。厳密な型紙は定められておらず、テーラーがアレンジを加えてしまうこともありました。

当初は新聞や業界紙を通じて4種類の型が発表されましたが、最終的にはノーフォークジャケット型の甲号と軍服型の乙号の2種類だけが正式なものとして制定されました。フライイングして採用されなかった型を仕立ててしまった悲しい人もありました。着用が強制されていたわけではなく、当初の普及はイマイチでしたが、大戦末期になると町中を埋め尽くすようになりました。

(写真は戦前に現在の籠田公園近くに存在した織房洋服店で仕立てられた国民服乙号)

(米田)



岡崎市美術館

開館時間

午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日

月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP

<https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA

OKAZAKI CITY
MUSEUM
NEWS

【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第88号 2021年10月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高陵寺町峠1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)